平成 27 年 4 月
語り部：藤村　敏夫

　私は、今から７０年前の８月６日に、世界で初めて広島に投下された原爆に遭い、恐ろしく、悲惨な体験をした。当時の様子が今でも目の奥、胸の中に残っている。今日はその時の状況を話して、１人でも多くの方が戦争はしてはいけない、まして原爆は使ってはいけない、持ってもいけない、作ってもいけないと感じてもらいたい。後世にも今日の話を伝えていただき、地球上がいつまでも戦争のない平和であり続けてほしいと願う。
　原爆が投下されたときに私がなぜ広島にいたのか話をする。１３歳であった昭和１９年１１月３日に、日本国有鉄道の広島第１機関区に勤労学徒として広島に徴用された。機関車を動かすための仕事をしていた。
　原爆が投下された８月６日は、８時前に寄宿舎を出て機関区で働くため出勤した。３０人くらいが集まって、班長の号令のもと朝礼を行った。ミーティングの最中に、機関車が入っている車庫の各窓から一斉に光が入ってきた。その光は青い様な、白い様な、紫ともいえるようなもので目に突き刺さる強い光だった。それと同時に、爆風と熱風が車庫の各窓を突き破って入ってきた。ミーティングをしていた者たちは２メートルぐらい吹き飛ばされてしまった。幸い大きな怪我はなかったが、建物の柱や消火栓にぶつかり、大勢が外傷を負った。しかし、何が起きたのかさっぱり分からなかった。しばらく腹ばいになって避難していた。一寸先が見えないほど真っ黒になっていた。
　空襲があった際は、常に耳と目をふさぐように言われていたので、その場に伏せていた。怪我はしていたが、意識ははっきりとしていたので、何とか起き上がり、立ち上がって外を見ると、出勤前までは、ぎっしりと立ち並んでいた広島の家が１軒も残らず無くなっていた。助けを求めるうめき声が各方向から聞こえてきた。家の中にいた母、子、老人たちは、倒れた家の下敷きになってしまった。逃げようとしても、柱の下敷きになっていたので、どうすることもできなかった。
　私がいた近くに小さな子供と母親の家があった。その親子が家の下敷きになった。子供が、「お母さん、背中に何か落ちてきた。苦しいよ。」と叫んでいた。母親も我が子の名前を一生懸命呼びながら、「今すぐお母さんが助けてあげるから。頑張って。」と必死に子供を励ましていた。ただ、その母親も倒れた家の下敷きになっており、身動きがとれなかった。母親は何とか我が子に手を差し伸べていった。やっとの思いで、親子は手を取り合った。そこから、母親は我が子の手首をつかみ、家の下敷きから引っ張り出そうと

したが、母親も下敷きになっていたのでどうすることもできなかった。助けを求める声が今でも私の耳に残っている。
　機関区の上司より、機関区の管理部の消火に行くよう命じられた。その時にはすでに、どこの家からも火が上がり、それが連なり、まるで火の海のようだった。４０～５０人を乗せて、３台の機関車を連結して向かうが、線路に落ちている散乱物を取り除きながら駅に向かった。管理部に向かう途中、一頭の馬が人を蹴飛ばしながら走ってきた。馬のお腹には穴があいていた。どこかの馬小屋に繋がれていたが、爆風で飛ばされて逃げ出してきたのだろう。
　やっとの思いで、広島駅のホームに着いた。駅で見た光景は悲惨だった。
　駅の構内に入ると、ちょうど山陽本線の上下線が停まっていた。ホームには乗り降りする人で何千人もの人たちがいた。そこに原爆を落とされたので、ホームにいた人たちは全員が全身に大やけどを負っていた。服は引きちぎられ、裸のような状態だった。そういう人たちが我先に逃げようとしていた。当時の広島駅には地下道があり、そこしか逃げ道がなかった。ホームから地下道を通って駅の外に出るので、大勢の人たちが地下道に降りる入口に集中した。前の人が転んでしまうと、後ろの人たちも重なってしまった。後ろからは、我先に降りようと人が押しかけていた。
　私たちはそういった状況を見ながら、やっと管理部に到着した。管理部は７階にあり、消火しようにも駅周辺が火の海だったため消すことができなかった。周囲の火災によって、ついに管理部も火を噴き始めた。それでも２時間ぐらいは頑張って消火活動を行った。しかし、消火をあきらめて帰ることになった。
　原爆投下時に、何かの用事で外に出ていた人たちは、家の下敷きにはならなかったが、全員が火傷を負った。体、胸、背中、腕など全身火傷をした。火傷を負うと、火ぶくれができた。私たちが勤めている車庫のすぐそばの広場にポツポツと人が集まってきた。見ると、全員が大火傷を負っていた。当日は真夏だった。火ぶくれができているため、座ることも、横になることもできなかった。炎天下の中で、何かにもたれて立っているので精一杯だった。
　全員が「水をくれ。喉が焼ける。苦しい。」と叫んでいた。火傷をした人には水を与えるのはいけないと聞いていたが、私はすぐ近くにいた１０歳ぐらいの少年に水をあげようとしたが、蛇口をひねっても水が出なかった。パイプに残っていた赤いような、錆びたような、腐ったような、生ぬるい水をコップにとり、少年に与えた。少年は２，３口コクコクと音を立てながら飲んだ。それまで張りつめていた気持ちが緩んだようで、私に向かってにっこ

りと笑ったような、ありがとうと言ったような顔をしていた。次の人に水を与えようとすると、その少年はその場に崩れるようにして倒れていった。地面は焼きつくような熱さだった。どうにか少年を陰まで連れて行こうとしたが、全身に火ぶくれができていたので、触ることができなかった。触ってしまうと、火ぶくれが破けてしまう。その少年には、その場にあった板切れで陰をつくってやった。当時の人たちは、原子爆弾だとは誰も分からなかった。

先ほどの親子は、手をぎゅっと握りしめ合って白骨死体となっていた。私はそういった悲惨な悔しい光景を見た。

広島に行くと、当時の状況の写真や資料がたくさんある。よく見て、今後、日本は、世界は、地球は、戦争をしてはならない、まして原爆など作ってはならないということをずっと伝えていってほしい。

感想・質疑応答（約 10 分）

・戦争はいけないと思った。

Q：原爆投下の時はどうだったか？

A：今のマツダスタジアム辺りに機関区があった。当時１４歳だった。

Q：少年には水をあげたのに、なぜ自分は水をのまなかった？

A：水道もポンプも電気も爆発で何もなくなった。全部吹っ飛んだ。水道もほとんど出なかった。

Q：原子爆弾が落ちたときにどこにいた？

A：何が起こったのかさっぱり分らなかった。当時は右往左往していた。手足が動いたので火消には参加したが、悲惨な状況をみながら、夕方までは機関区にいた。

Q：どうやって生き延びたのか？

A：私は山口県岩国市に産まれた。戦後は田舎に引っ越した。農作物を作って生活しており、勉強は出来なかった。親が「勉強はしなくていい、二度と再び都会へは出さない」と言った。定時制の学校へ行きながら、農家の手伝いをして生活をしていた。